

第4回 点字ブロックと共生社会

先月号で「点字ブロックタクシー」を取り上げましたので、続けて点字ブロックの話題です。

昨年の秋頃だったでしょうか、朝日新聞に車いす使用の娘さんがいるお父さんが、次のような内容の投書をしてられました。

「点字ブロックがあると、車いすに『ガタガタ』が伝わり、娘が苦痛に感じている。視覚障害を有する方はガイドヘルパーと歩くことが多く、点字ブロックがなくても問題ないのではないか。車いす使用者にとっては、点字ブロックが新たなバリアになっている。」

この記事を読んで、「反論しないといけない」と思いました。この制度は通学や通勤には利用できないこともあり、視覚障害者がいつもガイドヘルパーを利用して歩いているわけではないのです。私自身も同行援護の業者との契約はしているものの、通勤、通院、買い物など、日常生活のほとんどの場面において単独での白杖歩行です。一人歩きをする視覚障害者にとって点字ブロックはなくてはならないものです。

しかし、「待てよ」と思いました。肢体障害を有する方には肢体障害ゆえの不自由があります。点字ブロックが車いすをとおして体に響き、困るだろうとも思います。また、自転車のタイヤが点字ブロックの溝にはまり、ハンドルの操作がしにくいということも聞きます。ベビーカーを利用している方、高齢者などで足が上がりにくい方にとっても点字ブロックがバリアになっているかもしれません。

私の住んでいる岡山市は、全体として道幅が狭く、特に歩道が大変狭くなっています。また、歩道の路面が悪く、ガタガタしています。さらに、お店や事業所などに歩行者や自動車がスムーズに出入りしやすいように、歩道が部分的に傾斜しており、まっすぐに歩くことが難しいところもたくさんあります。

では、この社会に生きる人々の、様々なニーズを理解し、お互いがより安全に通行できるようにするには、どうしたらよいのでしょうか。皆さんはどうお考えになりますか。私は、例えば、歩道を少しでも広くしてはと思います。そうすれば、たとえ点字ブロックがあったとしても車いすの方やベビーカー、自転車の方は、これをよけて通ることもできます。

このように、異なるニーズを有する者同士が対立するのではなく、どうしたらお互いに便利に過ごせるのかを考え、協力していくことで、「人に優しい街作り」ができ、真の「共生社会」となるのではないのでしょうか。そのためには、まずは、障害の有無や種類をこえて、コミュニケーションを図っていく必要があります。

※6月号、7月号と、点字ブロックに関する「つぶやき」となりました。次号からは、第1、2回に続き、私の少年時代を振り返ってきたいと思います。

筆者：志水克典(岡山ライトハウス点字出版所 所長、元岡山県立岡山盲学校教頭)